

事例番号 080 人間優先で逸品のまちづくり(静岡県静岡市・呉服町等の商店街)

1. 背景

静岡市は静岡県中部に位置する人口約 71 万人の県庁所在地である。市は県を南北に縦断する細長い形をしており、北は山梨県・長野県に接し、南は駿河湾に面する。まちの歴史は古く、7 世紀に駿河国がつくられる前は珠流河と表記する国造であった。戦国時代には駿府と呼ばれ、今川氏の居城として城下町の町割が形成された。江戸時代には徳川家康が隠居して居城し、駿府は江戸時代を通じて東海道の宿場町として栄えた。

明治に入って駿府は静岡と改称されたが、中心市街地の商店街は発展を続けた。現在の呉服町は今川氏の時代には駿府の本町と呼ばれて既に町の中心であったが、徳川家康が 1609 年に行った町割で駿府 96 ヶ町が定められてからは呉服町と呼ばれるようになり、今日に至っている。静岡市中心部にはその他にいくつもの古い商店街があるが、それらの多くは単にモノを売る場所ではなくモノづくりの拠点でもあり、下駄、人形、家具、建具、茶などが作られてきた。

近年に至るとそれらの商店街は地価高騰による人口流出や駅前地区への商業拠点の移動等により空洞化の兆しが見られるようになった。そのため、衰退が現実になる前に商店街の活性化を図ろうとする動きが出てきた。

2. 目標

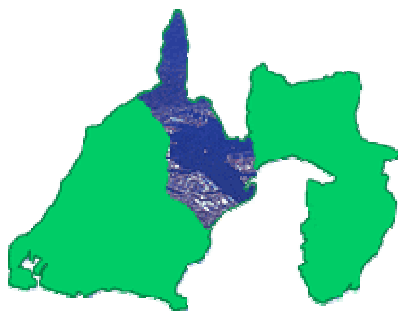
第 1 次静岡市総合計画(2005 年度～2009 年度)は、目指すまちの姿を「活発に交流し価値を創り合う自立都市」と表現している。そしてそのための「まちづくりの戦略」として以下を掲げている。

- ① 協働の力にあふれた市民の集うまちをつくる
- ② 自治の力を活かし市民が満足するまちをつくる
- ③ 情報発信をくりかえし世界に誇れるまちをつくる
- ④ 安全、快適、活力ある市民が安心して暮らせるまちをつくる

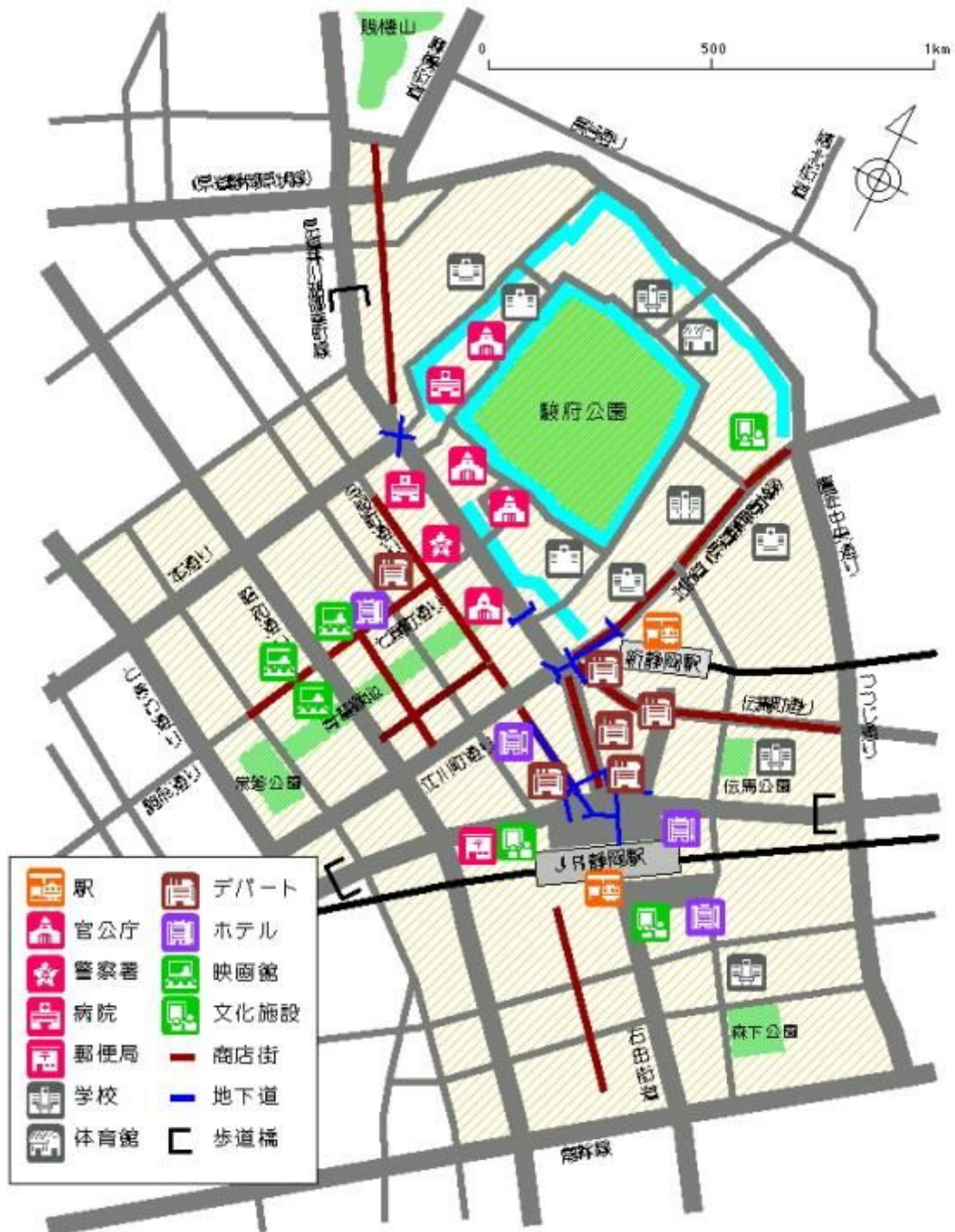
市民主体で街の交流を活性化して新しい価値を生み出していくという考え方は、中心市街地の各商店街における活性化の試みをも表現するものとなっている。

3. 取り組みの体制

商店街、関係機関の協働により商店街の環境整備、活性化が図られている。



静岡市の位置 (資料:静岡市)



静岡市の中心市街地 (資料:静岡市)

4. 具体策

(1) 呉服町通り

① 歩行者優先の道づくり

現在の呉服町は複数の百貨店も立地する静岡市の代表的な商業地区であるが、呉服町通りは車道幅員が 5m と狭く、自動車での利用が不便な地区であった。しかしながら、市は「商店街振興組合呉服町名店街」（呉服町通りに複数ある商店街団体の中のひとつ、以下「呉服町名店街」）からの要望により同地区では道路の拡幅は行わず、逆に自動車が入りにくいように車道の石畳化、パーキングエリアの縮小等、歩行者優先の道路整備を行った。また、信号の設置をしないことで自動車利用の自粛と歩行の快適性向上を図った。同時に、呉服町名店街がアーケードの改修、モニュメント、ベンチの設置、街路樹の整備を行い、歩行空間としての魅力を高めた。この事業の経緯は以下のとおりである。

1990 年 7 月 呉服町名店街が「余力のあるうちに対策を」との意識から
「コミュニティマート構想」（通産省補助事業）の策定を開始した。

1991 年 10 月 「呉服町モール整備事業基本計画」を呉服町名店街が作成
（翌年 3 月市に報告）

1992 年 10 月 市総合計画で「街づくり事業」に位置付け
（翌年 2 月公安委員会と協議）

1994 年度～1995 年度 事業実施

現在の呉服町通りは、呉服の布地織りに使われている伝統的な格子織り模様を赤色系の御影石を使って表現した石畳、近代的でシンプルなイメージの明るいアーケード、国際交流モニュメント等数々のモニュメント、アーチ、モニュメント・ベンチ、江戸時代の行灯を現代風にアレンジした街路灯などに彩られた大変レトロでモダンな通りになっている。呉服町通りでは将来はパーク＆ライドにより自動車の流入規制を行うことも検討されている。

② 一店逸品運動

1993 年から呉服町名店街が「ひとつひとつの店に光り輝く商品・サービスを」をモットーに「一店逸品運動」を開始した。これは、各商店が逸品として自慢の商品をアピールし、あるいは新たに開発するもので、商店の間で評価しあうなどの活動により商品の質を高めてきている。そして、それらの商品を統一的に掲載したチラシ、百貨店と共同で作成した折込チラシ（「保存版」と銘打つ）、毎年春の「逸品フェア」等を通じて全国的にその知名度が上がり、同様の活動が他の地域でも行われるようになってきている。

「一店逸品運動」の原点は、ハードだけ整備しても商店街の活性化には結び付かないという呉服町名店街理事長の思いにある。その思いは、2 つの商店街を見学したところから生まれた。ひとつは北九州のある商店街である。ハードは立派に整備されたのに客は少なかった。もうひとつは横

浜のイセザキモールである。ハードの整備はそれほどでもなかったが大変賑わっていた。そこには他にはない個性ある独自の商品の数々があった。

このような原点から発想された「一店逸品運動」であるが、その成功の要因は、専門家のアドバイスにより商品を厳選するとともにチラシの作り方を工夫したこと(逸品だけを掲載する等)、継続的に新しい「逸品」を生み出していること、「逸品」の内容は委員会における厳しい議論を通じて高められること、1995年からは統一感を出すために和染めのエンブレムを各店舗に置いたこと(地元の著名染色家がデザイン)、マスコミ等によるPRが全店参加の実現につながったこと、静岡県の支援(補助金等)があったこと等である。

ここで逸品の一端を紹介すると、「五福猫 T シャツ」「サッカーボールジュエリー」「本山産・幻の銘茶」「お茶屋さんの脱臭剤」「つえ傘」「私の夏 手芸パラソル」「黒水牛の実印」「いびき対策枕」「丸子紅茶 CAKE」「防水堅牢皮靴」「極薄型札入ポケフィット」「ツイン名刺入れ 取り出し上手」「手のひら(コイン入れ)」「Ja-Ja パートⅢ(ダイヤモンド・バイソンの皮のバッグ)」などがある。

先に述べた環境整備に加え、一店逸品運動により「他では売っていないものを売っている」とのイメージを定着させたことが商店街の活性化に相乗効果をもたらしたものと考えられる。呉服町名店街はこの成功に満足して止まることなく、「100年委員会」を設けて「100年後にも生き残れる商店街」を模索し続けている。

③ ランドオーナー会議とSC手法の導入

呉服町名店街では、商店街のコンセプトにあった店舗を出店させる誘導が必要であることから、後継テナントを選定する際に入店を協議する機会として、店舗を所有する地権者と共に2か月に1回程度「ランドオーナー会議」を開催している。商店街の店舗構成をコントロールする仕組みとしてこのような会議を設けた例は全国でも珍しい。今後、より多くのランドオーナーの理解が得られるよう努力することが課題となっている。

また、呉服町商店街は、商店街経営のノウハウを高度化するために財団法人日本ショッピングセンター協会に加盟した。今後、SCのノウハウを活用して商店街の活性化、リニューアルを図る方針である。



呉服町通り (資料: 静岡呉服町名店街)



呉服町の風景 (写真提供:静岡市)

(2) 七間町通り

① 歩行者優先の道づくり

呉服町通りと同様、歩行者のための道づくりを行った。その経緯は以下のとおりである。

1988年 電線類地中化にあわせて「街づくり事業」を行うことを決定

1989年5月 「商店街振興組合七間町名店街」(以下「七間町名店街」)が市に「街づくり事業計画案」を提出

1989年10月～ 整備推進会議開催(七間町名店街、市、県警、静岡中央署)

1990年3月 「街づくり事業計画」決定

1990年度 事業実施

市と七間町名店街とが共同で駐輪場(商店街利用のための短時間用)の設置も行っている。

② 商店街の活動

七間町名店街は、どこにもないような個性ある街並みの創出を目指している。その一環として、大きく育ったケヤキと間接照明による光の演出で、店外と店内との融合を図っている。



七間町の風景 (写真提供: 静岡市)

(3) 青葉通り

「シンボルロード整備事業」(1983 年度～1991 年度)として、市がモニュメントの設置、隣接する常盤公園の整備、地下駐輪場の整備を行った。

また、商店街が静岡夏祭り夜店市、クリスマスシーズンライトアップ等のイベントを実施している。



青葉通りの風景 (写真提供:静岡市)

5. 特徴的手法

複数の商店街で人間優先の道づくりを行い歩行空間のネットワーク化を図ったことから、人々の回遊の増加が見られるようになった。また、ハード整備(人間に優しい通りの整備)とソフト開発(一店逸品運動、イベント等)とをうまく組み合わせて相乗効果を発揮している。

6. 課題

周囲の地区と連携しつつ回遊空間の拡大を図っていくことが継続的な課題である。

(参考・引用文献)

静岡市ホームページ

呉服町商店街ホームページ

中小企業庁ホームページ

日本政策投資銀行地域企画チーム『中心市街地活性化のポイント』ぎょうせい、2001 年

国土交通省総合政策局事業総括調整官室『自立型地域コミュニティへの道』ぎょうせい、2004 年

日本建築学会編『中心市街地活性化とまちづくり会社』丸善、2005 年